

# 弘前市の市民税分布の地理学的研究

高 橋 勉

## 序

人々はそれぞれの地域で生活し、その地域の環境内での経済活動がその所得となって表わされる。そこで所得に係る市民税を分析し研究することはその地域の特性や都市内部地域の構造の一面でも知りうるものと思う。

ここで市民税の分布を指標とするのは、いわゆる二次的因子（複合要素）<sup>(1)</sup>である市民税を分析して他の一次的因子<sup>(2)</sup>を考えるより有利であると思うからであり、市民税の分布図からみて弘前の内部的構造を考えてみたいと思ったからである。

### (1) 資料とその方法

弘前市民税は昭和40年1月～12月までの所得にそれぞれの段階の税率によって算出したものであり、それに均等割として400円をプラスしたものである。40年度の市民税の額と住所を「市民税徴収台帳」より無作為抽出を行い（20%の抽出）税額を5千分の1の地図上に分布させ次いで2cmの方眼をかけてその方眼の中の平均値をとり、その中央に平均値を書きそれぞれ $0 < 1$ 、 $1 < 3$ 、 $3 < 5$ 、 $5 < 10$ 、 $10 < 50$ 、 $50 < 100$ 、100以上の7階級（単位1000円）別に等値線を引いて分布図を作成した。

### (2) 市民税分布と都市内部地域との関係

#### (a) 商業地域

土手町を中心に百石町や駅前などであり、一応商業地域の中心であった本町が商業地域としての機能が薄れ官公庁的性格を持ってきている。最高の商額地域である土手町が都市の商店街であり、この土手町の道路に続く松森町付近まで一応途中で3千～5千の地域で不連続になっているが、商業の核心地域である。

一方駅前付近の高額地域があり、これは鉄道駅にともない発達してきたものでスーパーマーケットなどもみられ新興商店地域といえるであろう。下町においても駒越町のような商業地域も付近の住宅相手の小規模な商店が多く、商業地域として的高額地域は認められず経済的活動の不活発さが表われており、下町は商業地域としての性格は認められない。

又代官町も土手町近くを除くとほとんど高額地域はなく中央通りも一部には小規模な高額地域はあるが問屋街であるこの通りは商店数も少なくなっている。百石町は映画館や喫茶店などが多く有楽街的な性格が強くみられている。その他に弘前には商店街も少なく商店規模も小さくその所得もこれらの中心商店街地域に比べてほとんど見る影もないくらい低くなっており、

中心街地域となっている土手町などの地域と比べそれ以外の地域では経済活動の不活発さ商業発達の不活発さがわかる。つまり都心商店街と他の商店街との間にはその所得に格段の差があり、住宅地域を相手としている商店などはその住宅地域と同額やあるいはそれよりも低い額を示すくらいである。

(b) 官公庁・業務街地域

公園付近であり市役所の裏側は1万円台の高額地域が見られるが、これは官公庁と関係があると思われ、下宿や高級住宅をさらに弁護士そして病院もあり、これら官公庁業務地域は高額の地域が多く活発な活動がなされておりさらにこの地域が次々に発展していくものと推測される。

(c) 住宅地域

弘前には住宅地域は都心にもあちこちあり、かたまった高級的住宅は存在していないと思われるが新しい家屋は桔梗野富田方面に多くみられ、富士見町あたりのかなり高額の地域である彌宜町、新町、樹木町などの高級住宅もみられる。逆に低階級と認めうることのできる住宅地域もあり下町の前町、袋町、紺屋町、在府町、相良町などの1000円以下の地域が広くみられる。徳田町、北柳町などの付近も5000円以上の地域として認めうる。

(d) 工場地域

弘前市のオ二次産業の比率は著しく低く、工業生産は全国的な位置から甚だしく立遅れわずかに、醸造業やリンゴなどの食品加工業があるにとどまっている。近年広葉樹工業の振興をみるに至り、フローリング工業やブナコなどの製材工場が多くなりつつある。しかしながら小規模経営が多く、食料品製造業が40%もあり経営不安定な工場もかなりある。駅前付近が多く集まっており次いで電車の中央弘前駅付近が多い。駅前中央通りに沿って食料品、木材、機械等の工場が続いており、この地域は高額地域となっており5万円台の地域が二つもあり漸次低くなっておりかなりの所得がありそうである。駅前から和徳松ヶ枝町付近も木材、酒造、自動車関係の工場が三つばかりありその地域も小規模ではあるが5万円台の地域が一つ分布している。電鉄中央弘前駅付近のシードル会社やその他に食料品、酒造業などの工場が集まっており1万円以上であり土手町の商業地域から続いている地帯となっている。弘前大学付近の酒造業工場から食料品そして富士見町へ続く4つの工場はブロック工場、リンゴ加工工場も含め弘前としては大規模経営となっており、5万～1万台の地域となっている。富田の印刷工場も1万円台を示し朝陽橋から土淵川の1万台地域も工場の分布がみられる。工場地域は散在的だが工場のあるところはほぼ高額地域となっており、商業地域に次いで市民税のかなり高い地域が多くなっている。

### (3) 市民税と地価分布との関係

地価分布図を一見して分る事は、土手町を中心にして同心円的な広がりを示しており、都心商業地域である土手町が100000台をトップにそこから遠ざかるに従って低くなっているが代官町付近は高く、又百石町も3万台を示しているところが明らかである。一般に土手町から内部地域、瓦ヶ町や柳町などの付近が高くなっている。これはやはり道路に沿っているがそれに遠くなるに従って低くなっている。しかし必ずしも道路からの距離に比例しているわけではなく、下町は最低の値を示している。こうした地価分布と市民税分布を比べてみると、市民税の方は比較的都心から離れていても高額地域もみられるが、土手町は地価・市民税の分布とも高額地域になっており、これらは当然都心商業地域の性格にあると言える。つまり地価においては、その位置関係に強く左右されることが市民税よりも強いということであり、市民税の分布状態も位置なくしては考えることはできないが地価ほどその位置に関係してはいないと言いうことができよう。さらに言うなら地価は、商業、交通などの因子に強く左右される。特に商店地域には強く影響される。市民税は必ずしもそれらに左右されてはいないと言えよう。よって市民税分布状況と地価分布図を考察してみると、商業地域と言える土手町や駅前付近はこれら地価とは高額地域とは一致し又低額地域とも一致する。他の分布状況はあまり一致してはいない。しかし下町地域の低額地域は一致していることは明白である。さらに工場地域も弘前は古くからの工場が多く、地価に左右されるということは少なく駅前に集まっており、又電鉄中央弘前駅付近にもあり比較的地価の高い地域でも分布しているし、これらは高額地域にあっており、工場と地価との関係は弘前においてはあまり関係ないようである。さらに住宅地域も桔梗野方面へ最近伸びていることは、地価が安いこともあるし、都市の外方への発展も考えられる。そしてその市民税も、他の地域に比べて高額な地域が少なからず見られる。こうした地価分布図と市民税分布図は前者はかなり規則的に同心円的であるのに対し、後者は不規則な形体が見られるのは、この位置に関係ある地価とあまりない所得ということから出てくるようである。

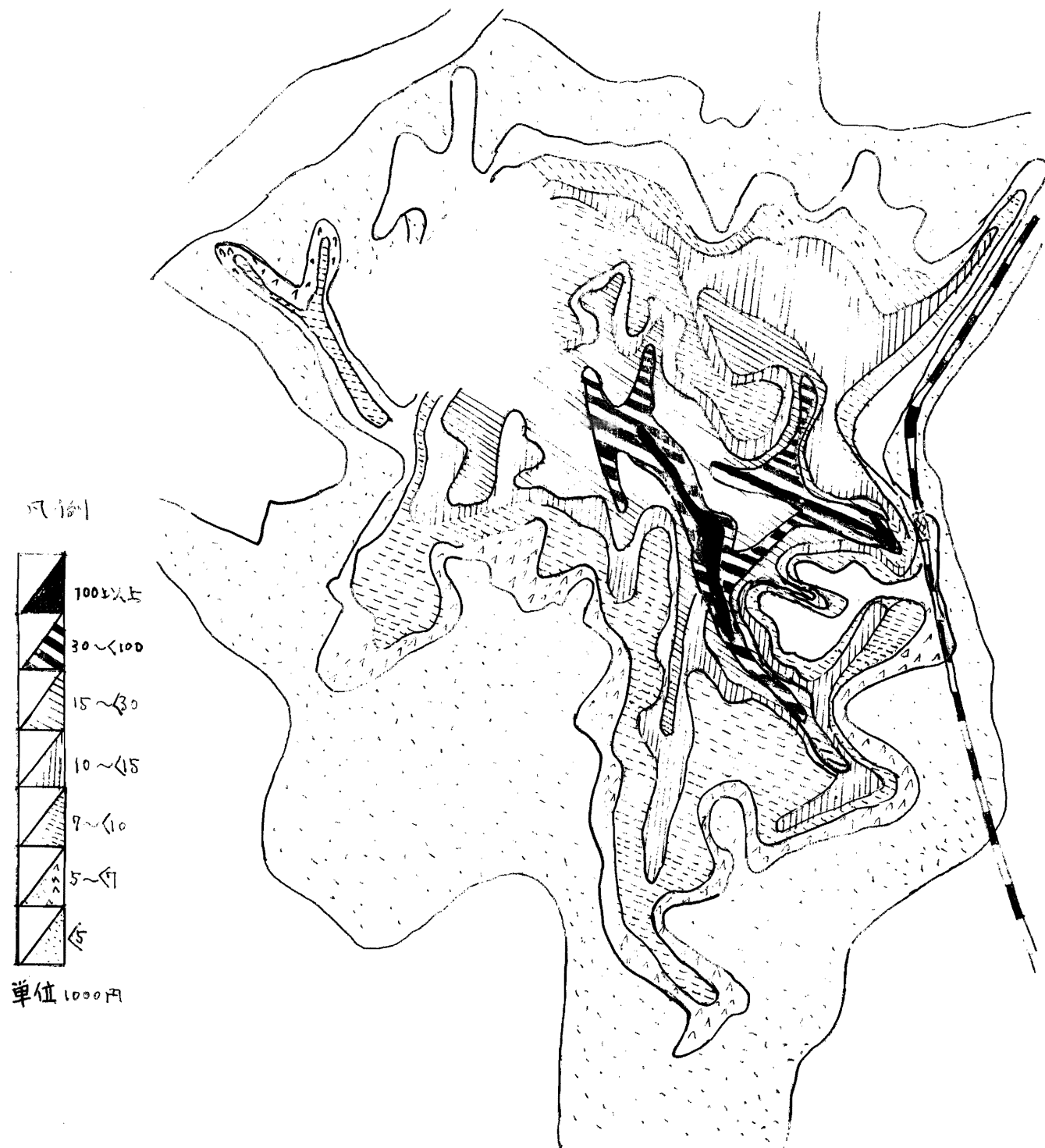
### 結 論

市民税分布図を基準として、いろいろの方面から考察してきたが、経済活動の活発な地域は都心商店街土手町であり、次いで駅前方面であり、しだいにこの方面への商店発達が見られつつあり、これらは地価分布図でも言えることであって、もはや本町は中心的商店街の性格が失なわれていると言える。さらに工場地帯は散在であるが、駅、電鉄駅付近に多く、それらの工場分布と市民税の高額地域はほぼ一致している。又官公庁や業務街地域もかなりの高額地域になっており、仙台で見られる業務地域の低額地帯とは逆とも言える。そして交通との関係は商

# 市民税分布图



# 地価分布図



凡例

- 100以上
- 30~<100
- 15~<30
- 10~<15
- 7~<10
- 5~<7
- <5

単位 1000円

業地域のみによくみられ、これらは地価分布図とも一致しており、さらに住宅地域は桔梗野方面へ広がりつつあり、高額納税者少なからず多くなっている。又道路から遠くなるにつれて低額地域が多くなっているが必ずしもそうとも言えずその規則性は見られない。

これらをまとめてみると

- (1)基本的構造として商業地域、住宅地域等としいにその性格が地域分化されつつあるが、商業地域を除いて明確にそれをとらえることはできない。
- (2)市民税の分布状況は都心商店街と駅前が最高を示し、住宅及び住宅地商店街とは段ちがいである。
- (3)都心はすでに土手町に移っている。
- (4)住宅地の発展方向は同心円的でなく南へかたよっており、桔梗野、富田方面に分布されている。

#### 参 考 文 献

- (1)(2) 田 辺 健 一 (1952) 東北地理 5-1  
市民税の分布よりみた仙台市の内部構造  
才2次要素による分析の試み